

紀伊大島3集落の家族ライフサイクル変遷に伴う住まい方の変容について — 傾斜環境における住空間変容の研究その2 —

正会員○水野美由紀 *1

同 本多友常 *2

同 平田隆行 *3

同 門永琢 *4

生活行為 変容
増改築 過疎化 高齢化

1. はじめに

年々、過疎化と少子高齢化が進みつつある紀伊大島において、ライフサイクルの変化に伴う住居変遷について調査をおこなってきたが、ここでは、住居内部の住まい方の変容に迫る。日常の生活行為を大別し、住居平面図をもとに調査を行い、住居型別に住まい方の特徴とその変容をたどる。これら結果から、紀伊大島における住居計画上の基礎データを得ることを目的とする。

2. 研究の方法と分析の視点

紀伊大島では、間取りの変遷について、田の字型→和室通過型→中廊下型といった順序で住居形態が発展してきたことは既往研究で(*1)明らかとなっている。そこで、住居平面図をもとに、日常の生活行為による間取りの使い分け方について考察を行うため、「寝る」、「食べる」、「寛ぐ」、「もてなす」の4パターンの生活行為について各世帯でヒアリングを行った。

調査対象としては、既往研究(*1)で得られたデータをもとに、大島地区16件、須江地区12件、檜野地区14件を対象にヒアリングを実施した。

分析の方法は、これら調査結果を住居敷地内部で行為が営まれる室、場所のハッチ分け作業を行った。(図1)さらに、田の字型住居・和室通過型住居・中廊下型住居の3住居型に分類して、その特徴と傾向を探った。

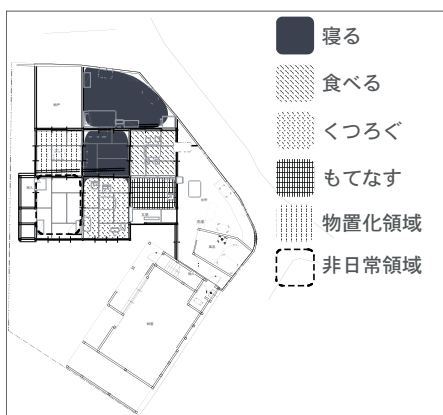


図1

3. 分析の結果

3住居型の典型を用い、間取り使い分けパターンを図2にまとめて示した。

まず、3住居型に共通した間取りの使い分け方に着目

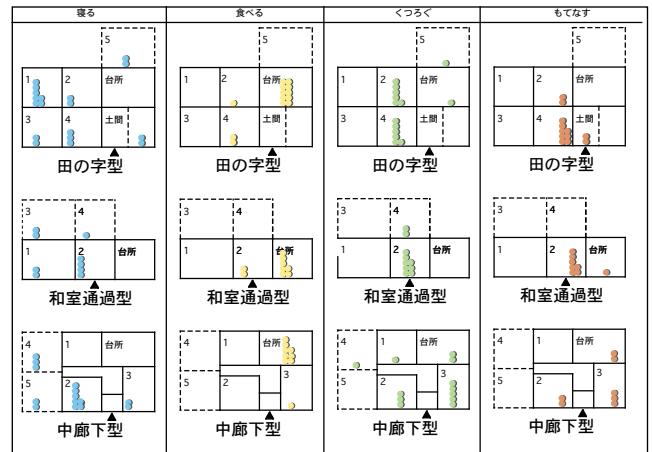


図2

した結果、次のような特徴をあげる。

(1) 玄関脇の室を「寝る」行為に使用

これは、2通りのパターンがある。1つは、子供が他の生活行為と時間差で、「寝る」室として転用していることがいえる。ここでいう「子供」とは、世帯主との続柄を指し、仕事を持つ成人である場合が殆どである。昼間は家を空け、夜遅い帰宅である点と、住居の空間構成上、子供室が設けられていない点で共通している。2つ目に、高齢者が介護をうける便宜上の理由があげられる。家族の目が行き届きやすく、福祉サービスを受ける際、ヘルパーを「もてなす」必要が出てくるためとされる。

(2) 「寛ぐ」と「もてなす」室の一体化

紀伊大島では高齢世帯のみで生活している家族が多く、前述のような福祉サービスを受けたり、訪問者とコミュニケーションをとりやすい位置に、日常的な「寛ぎ」の場を設けている様子が伺える。また、「もてなし」の室は外部に開放的で、間取り配置上、日照や風通しの面で、過ごしやすい場所であることが多い。よって、「寛ぐ」室と「もてなす」室は区別されておらず、一体化して使用されている傾向にある。

(3) 奥の室、2階は物置化する傾向

子供が高校を卒業すると、大半が島外へ出る。よって、子供室は不要となり、遊休室が出てくる。さらに、家族の高齢化に伴い、生活行為スペースが縮小化され、2階や日当たりの悪い奥の部屋は物置化する傾向が見られる。

Factors for Transformations in a Sloping Setting

Study on transformation of the way of living with the transformation of life-cycle analysis of 3 villages in Kii-oshima

MIZUNO Miyuki, HONDA Tomotsune, HIRATA Takayuki and KADONAGA Taku

さらに、3住居型別にみられる特徴を次にあげる。

◆田の字型住居

図2にある室4に、生活行為の全般が集中していることがあげられる。かつて、田の字型住居の南側2室は接客空間として、表向きの空間構成をとってきたが、田の字の南側にプライベートな生活行為が移動してきたことと、家族構成員の減少で、北側の2室が物置化する傾向が見られる。

◆和室通過型住居

図2から通路になる室2で、生活行為の全般が集中していることがわかる。これは、和室通過型住居において、通路となる和室を除けば、室数を確保する余裕がないことから、室2を日常的に使用し、生活行為が集中することは必然的である。さらに、2階化している住居では、2階が物置化する傾向にある。これは、田の字型住居の場合と同様、家族構成員数の減少と高齢化のため、2階を日常使わないことが理由に挙げられる。

◆中廊下型住居

台所と連結している室3で、「寛ぐ」・「もてなす」の行為が目立つ。さらに、玄関脇の室2で、「寝る」の行為が集中していることに注目すべきである。これは、先に述べた要因とは別に、中廊下型において、老人室が玄関脇に設けられるパターンがいくつか見受けられる。よって、前世帯主及びその妻の死去をきっかけに、現世帯主夫婦の夫婦別就寝が実現することから、玄関脇の室に「寝る」行為が集中してくると考えられる。また、玄関から遠くに位置する室1、室4は物置化する傾向にある。これも、家族構成員の減少に伴って見られる現象である。

4. 家族変遷に伴う室転用パターン

以上で、現況としての生活行為別間取りの使い分けパターンを捉えてきたが、家族の変遷に沿った室の転用パターンについて、さらに考察していきたい。

ここで、ヒアリングにより過去にさかのぼる間取りの使い方について調査した結果、室の転用パターンについては、家族の変容の仕方、その傾向が大幅につかめることが明らかとなった。図3は、住居形態別に家族の住まい方の変化を直系家族型と家族縮小型の2パターンにわけ、その1例を示した。

主に、直系家族の典型としては、離れを所有する場合、世代別に住み分けを行い、世代交替が発生すれば寝室の入れ替えがおこることが明らかである。また、子供の成長とともに、夫婦や子供の就寝分離を行うこともわかっている。次に、家族の独立や死去で家族の縮小化がおこっている世帯では、子供室や老人室が物置や客間に転用されることも明らかとなっている。

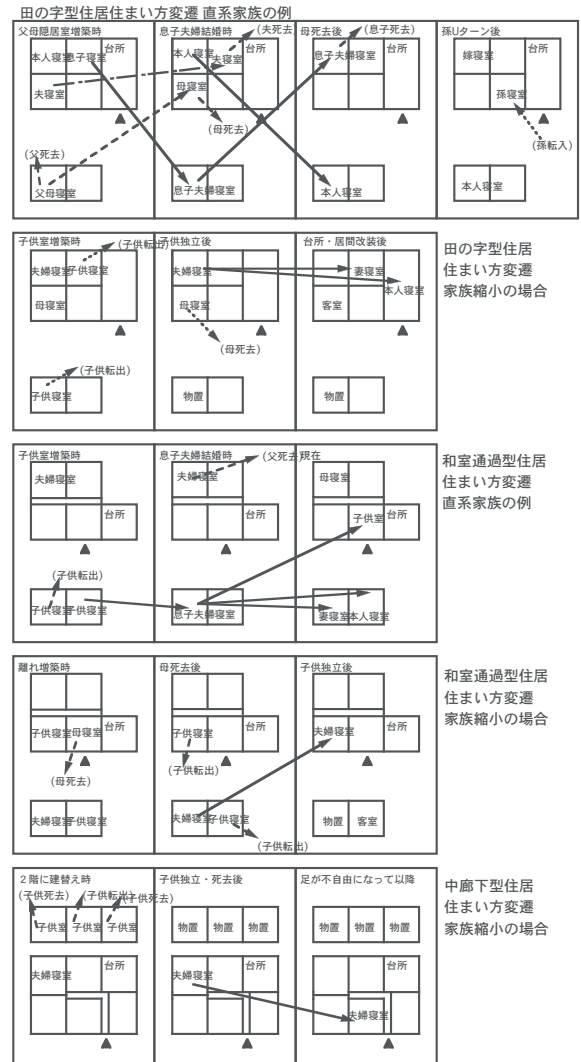
5. まとめ

家族ライフサイクルの変化に応じて住居の使われ方の変化を詳細に見てきたが、変化の傾向は全国的な現象と軌を一にしている。

3集落に共通して言えることは、住居そのものに変容サイクルが存在しており、これが集落ごとの特徴に大きく影響している点が明らかとなった。住居は①増築、新築期があり、やがて世代間による②住空間の交換期を経て、次に③室内の機能転換期、そして家族の死去、転出による住居内の④機能退縮期のサイクルが頻繁におこっている。そして建築的な初期条件としてのわずかな地域差が、ライフサイクルの変化に応じて、地域性とも言うべき集落環境形成に深く関わっていることが明らかとなった。

*1：本多友常他3名 「紀伊大島の3集落における住環境の差異」
日本建築学会近畿支部研究報告集 第42号・計画系P461.～P.464

図3



*1 和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.

*2 和歌山大学システム工学部 環境システム学科教授・工修 Prof., Faculty of systems engineering, Wakayama Univ., M. Eng

*3 和歌山大学システム工学部 環境システム学科助手・工修 Research Assoc., Faculty of systems engineering, Wakayama Univ., M. Eng

*4 和歌山大学大学院システム工学研究科修士課程 Graduate Student, Graduate School of Systems Engineering, Wakayama Univ.